



第3回(5月上旬号) 『執事』① 誤訳編

by 柴田耕太郎

文法力をつけたいが、無味乾燥な文法書など読みたくない。

そんな読者のために、人気小説の翻訳書にみる誤訳・悪訳をとりあげ、文法面から解説してゆく。題材は最近映画化された『チョコレート工場』の原作者で、日本がロケ地になった映画『007 は二度死ぬ』の脚本家でもあるロアルド・ダール(Roald Dahl)の短編から任意に選ぶ。いずれも原文で 10 ページに満たない短いものだから、読者も自分で訳してみ、この解説を参考に、市販訳との優劣を競ってみてはいかがだろうか。

冒頭に誤りの種別と悪訳度を示したうえ、原文と邦訳、悪訳箇所を掲げます。どう悪いのか見当をつけてから、解説を読んでください。パズルを解く気分で、楽しみながら英文法を学びましょう。

今回取り上げるのは、『王女マメーリア』(早川文庫、田口俊樹・訳)のなかの『執事』(Butler)

*原文3頁の短いものなので、指摘が細くなること、承知ください。

誤訳度：*** 致命的誤訳(原文を台無しにする)
** 欠陥的誤訳(原文の理解を損なう)
* 愛嬌的誤訳(誤差で許される範囲)

執事

[ストーリー]

成金のジョージ・クリーヴァーは、己の上昇志向を満たすため、一流料理と一流ワインで上流階級の人々をもてなしはじめた。主宰の晩餐会では、にわか勉強で、ワインの蘊蓄を傾ける。ひょんなことから、晩餐会の席上、ワイン鑑識眼のことで執事を罵倒するが、じつは自分たちが一流ワインだと思って飲んでいたものは、三流ものだったことが分かってしまう。

●名詞：** ●イディオム：**

With the help of these two experts, the Cleavers set out to climb the social ladder and began to give dinner parties several times a week on a lavish scale.

が、このふたりのエキスパートの助けを得て、クリーヴァー夫妻は社交界の階段を昇りはじめ、週に数回豪勢なディナー・パーティーを開くようになった。

[解説]

the social ladder は「社会階層」。イギリスは上流、中流、下流の階層社会であるとよく言われるが、それぞれの階層の中がさらに細かく分かれている。「社交界の階段」では、すでにそこに入っていて、より高く昇ろうとしている、と読めてしまう。ここは、例えば中流の中であったクリーヴァー夫妻が、中流の上、上流の下、さらに…、と社会階層を上げてゆくことを言っている。また set out to do は「…しようと試みる」の意。

修正訳：が、このふたりのエキスパートの助けを得て、クリーヴァー夫妻は上の階級に入ろうとし、週に数回豪勢なディナー・パーティーを開くようになった。

●イディオム：**

They were in fact so huge that even Mr Cleaver began to sit up and take notice.

で、クリーヴァー氏は急にワインに関心を示しはじめた。

[解説]

執事に命じて購入したワインの値段が法外なのを思い知ったクリーヴァー氏の態度を叙した箇所。sit up and take notice は「ぎょっとする」。直訳すれば「それらのワインの価値は実際にもあまりに途方もないのでクリーヴァー氏でさえ驚きはじめた」

修正訳：それで、さすがのクリーヴァー氏でさえ、思わず眼を剥いた。

●名詞：*** ●名詞：*** ●動詞：***

Then you take a mouthful and you open your lips a tiny bit and suck in air, letting the air bubble through the wine.

それから口いっぱい、舌をやや広げまして、空気と一緒に吸いこむのでございます。

[解説]

ワイン通ぶって、この訳文どおりのことを人に説いたら失笑されてしまうだろう。誤訳恐

るべし。

直訳は「少量を含み、口を少し開き、空気を吸い込み、その空気がワインを通して泡立つようにさせる」。mouthful は「一口；少量」。lip は広義では「口のあたり」だが、「舌」を単独で指すことはない。suck は他動詞と自動詞あるが、ここは他動詞で「…を吸いこむ」、in は副詞で「中に」。

修正訳：それからワインを一口含んで、口をうすく開けて、そのまま空気を吸い込んで、口の中のワインと混ざるようにするのです。

●副詞：** ●名詞：*

‘What’s the matter with the silly twerps? Mr Cleaver said to Tibbs after this had gone on for some time. ‘Don’t none of them appreciate a great wine?’

そういうことがあってからしばらく経って、クリーヴァー氏はティブスに言った。「あの低脳の不愉快な連中はいったいどうしたというんだ？だれひとりこの偉大なワインの味がわからないじゃないか」

【解説】

直訳は「こうしたことが或る期間続いてしまったあとに」。this は「上に述べたような状況」。go on はイディオムで「(事態が)続く」(on は副詞で「ずんずん、どンドン」の意)。「しばらく経って」ではなく、「しばらく続いて」なのだ。「低脳の不愉快な」は言葉の並びが悪いし、だらだらしている。ここは同じような意味を重ねてリズムを出し、悪態の度を高める表現だから、日本語ならどうするか、で訳語を考えたほうがよい。

修正訳：そういうことがしばらく続いた後、クリーヴァー氏はティブスに言った。「あのくそバカどもはいったいどうしたというんだ？だれひとりこの偉大なワインの味がわからないじゃないか」

●形容詞：***

‘I believe, sir, that you have instructed Monsieur Estragon to put liberal quantities of vinegar in the salad-dressing.’

「私が思いますに、旦那様、旦那様はムッシュー・エストラゴンに、サラダ・ドレッシングに通常の量の酢を、入れさせておいででございますね？」

【解説】

liberal は多義だが、この場合は「たくさんの、豊富な」の意。

修正訳: 「私が思いますに、旦那様、旦那様はムッシュー・エストラゴンに、サラダ・ドレッシングに大量の酢を、入れさせておいででございますね？」